

小1プロブレム対策を考える3

— 保護者サポーターの視点から見たS市すこやかプラン3 —

高木 友子^a

^a 湘北短期大学保育学科

【抄録】

S市A小学校における小1プロブレム対策すこやかプランの実施は4年目を迎えた。今年度は大きな変更があった。クラス再編成と担任のローテーションの廃止である。それに伴い、上級生保護者によるサポート期間は1週間短縮された。それにも拘わらず、サポート終了時期の新入生の生活行動の自立の度合いは前年度までと大きな差はなかった。むしろ、担任教員が固定されることと、クラス変更がないことで、新入生の安定は速やかであった。再編成とローテーションは効果よりも弊害の方が大きかったようである。

【キーワード】

小1プロブレム すこやかプラン 保護者サポーター クラス再編成 担任

1. 問題

本稿はS市立A小学校における小1プロブレム対策「すこやかプラン」についての報告第3報であり、プラン実施4年目にあたる内容とその成果について、特に保護者サポーターの適用を中心に報告する。

「小1プロブレム」とは小学校新入学児が「学習に集中できない、教員の話聞けず、授業が成立しない等」（東京都教育委員会 2008）の状態である。具体的には授業中に立ち歩いたりなどして、授業や集団活動の妨げとなる児童が複数見られ、教師がその対応に手が取られてクラスの指導に支

障が生じたり、問題行動をとる児童に他の児童が影響されて、授業やクラス活動が成立しなかったりする状態を言う。

小1プロブレムは高学年での学級崩壊と異なり、教員への反抗を意図したものではなく、担任教員の力量とは関係なく生じると考えられている。小1プロブレムは小学1年生の小学校の教育形態への不適応から生じる。

2007年から2009年の調査では2割以上の自治体や公立小学校から、小1プロブレムの発生が報告されている（月森 2013）。

小学校からの報告を受けて、近年では広く認知されるようになり、現場である小学校はもちろんのこと、小学校へ子どもを送り出す幼稚園や保育所、認定こども園でも小1プロブレムを予防するための対応が求められている。

<連絡先>

高木 友子 takaki@shohoku.ac.jp

小1プロブレムとは、幼稚園・保育所・認定こども園の保育形態と小学校の教育形態が大きく異なることにより、その差に子どもたちが不適応を起こすことである。小学校入学前の子どもたちが保育を受ける幼稚園・保育所・認定こども園では小学校入学の準備教育もその保育・教育目的の一つとされており、子どもたちがスムーズに小学校に適應していくために保育現場と小学校のギャップを埋めるべく、幼保小の連携が保育現場にも小学校にも求められている。

しかし、立地などの問題から、一部の幼保小を除き、日常的な連携は難しく、行事の共有や、入学を控えた園児の学校見学など、連携は時間的にも内容的にも限られている。また、都市部を中心に各園から進学する小学校が1校とは限らないため、必ずしも全ての園児が進学予定の小学校との連携を経験できるとは限らない。

幼稚園、保育所、認定こども園で基本的な入学前指導は行われているが、園生活と小学校生活のギャップに適應するのに必要な力を全ての子どもが身に着けられているとは言い難い状況である。

小学校側の対策としては、文部科学省は2011年度より小学校1年生、2012年度より小学校2年生の35人以下学級を実現させ、入学後少人数学級で児童の適應を図った。保育要録による児童の情報共有も義務付けられるようにはなったが、有効活用に必要な要録がどれだけ作成されているか、それがどれだけ活用されているかは、定かではない。小1プロブレムへの効果的な対応として、授業時間の柔軟な使用、補助教員もしくは支援員、ボランティアの配置、座学だけでなく「動的」な要素を授業に多く取り入れること（月森）、年度途中のクラス再編成などの方法が自治体や学校により試みられている。

首都圏S市A小学校では2011年度より小1プロブレム対策「すこやかプラン」を実施している。

筆者は2011年度、新入学児保護者として自身の子どもとその同学年の子どもたちの姿を通して、「すこやかプラン」の成果を観察し、2012年度、2013年度は保護者サポーターとしてプランに参加し、小学1年生の現況と保護者ボランティアを中心とした小1プロブレムへの対応とその成果を前稿で報告した（高木 2013、2014）。2014年度もA小学校は、すこやかプランを実施し、筆者は三度保護者サポーターとして参加した。本稿ではA小学校すこやかプランの4年目の実施状況と成果を保護者サポーターの立場から観察、報告、考察する。

2. S市「すこやかプラン」について

(1) A小学校概略

S市は首都圏に在る政令指定都市である。人口は約70万人。A小学校は、都内ターミナル駅より私鉄急行列車で約30分ほどのところに位置する駅から徒歩15分ほどのところ、商業地区にも近い住宅街の中にある。駅前の商業地区は比較的にぎやかな地域であり、都内への通勤の便もよいことから、最近までマンションや戸建て住宅の新築も増え、住民が増加してきている。A小学校の現在の在校生は約700名。2011年度、2012年度の新入生は4クラス編成、2013年度は5クラス編成であり、2014年度は約140名の新入生を迎え、4クラス編成となった。

(2) 「すこやかプラン」内容

A小学校によれば「すこやかプラン」とは「幼稚園や保育園で小さな集団に慣れてきた新入児に対して、小学校での集団生活や学習形態などに自然にとけ込めるように支援するプランのこと」である。2011年度より実施され、2014年度が4年目の実施となる。

実施4年目にはプランの内容に大きな変更が

あった。これまでの3年度では、入学時まず仮クラスが編成され、1か月を過ごし、その間の児童の様子を参考に本クラスが再編成されたが、今年度は入学当初から本クラスが編成され、再編成は行われなかった。また、過去3年度はクラスの再編成に伴い、仮クラス期間の1か月はクラス担任が1～3日交代で替わり、本クラス編成時に固定されたが、今年度はクラスと同じく、担任も入学時から固定された。

結果、2014年度「すこやかプラン」の具体的な実施内容は主に次の2項目である。

① 4月中毎朝の学年集会の実施

② 4月中保護者サポーターによる児童支援

学年集会は、全校集会など行事がある朝を除き、ほぼ毎日行われた。1年生の教室は1階だが、学年集会の会場である多目的室は別棟の3階にあり、そこまで整列して私語なく移動し、集会ではやはり私語なく、読み聞かせボランティアの読み聞かせと教員からの訓話を聞き、校歌を含むいくつかの歌の練習を行い、また整列して教室に戻ることを日課とした。集会の次第は前2年度と共通している。移動時間を除いた集会時間は30分程度である。

サポーターとして参加できるのは2学年在校生から前年度卒業生までの保護者である。2013年度は新生が多かったにも関わらず、サポーター登録者が少なく、サポート期間に入ってから、サポーターが知人や前年度サポーター経験者を誘って人員を確保するようであったが、2014年度は事前説明会から16名（内、経験者4名）の登録があり、クラス数が前年度より少ないこともあり、人手が不足した様子はあまり、見られなかった。

サポーターの職務内容は、児童が昇降口に到着したところから、下校時登校班が出発するまでの、児童の生活と学習の支援である。具体的には、挨拶の手本となり、靴箱やロッカーや机の中の物の

整理を手伝い、教室移動やトイレに付添い、給食配膳を援助し、着席したり、授業に集中したりすることが難しい児童を支援する。

シフトはかなり緩やかであり、各人可能な日時参加する。予めシフトを組むのではなく、毎日、サポートに来られたものが、援助の必要性の高そうなクラスから順次入り、それをサポーター控室のサポーター名簿に記した。2013年度は、小学校からサポーターの負担低減のため、サポートは始業前と給食、掃除、下校準備に限定する提案がなされたが、結局は担任から授業サポートの要望も出ていた。それを受けてか、今年度はサポート時の限定はなかった。

また、サポーター控室には記録ノートが置かれ、サポーターはその日特に気になった事柄を記し、教員やサポート同士の情報交換を行った。

サポーターは学校から貸与されたそろいの生成りのエプロンと名札をつけた。

3. 保護者サポーターの職務内容詳細

保護者サポーターの職務内容も高木（2013）とほぼ同じである。

登校時の挨拶、昇降口の児童の流れの整理、靴の履き替えや傘の片づけを援助する。

教室での机やロッカーの整理や名札の安全ピンを止める援助などを行う。

トイレや教室移動の付添い。児童同士が騒ぎすぎたり、暴力的なトラブルが生じたりしないように援助する。

体育時の着替えなどを含む、授業に使う用具の準備が自力でできない児童の援助を行う。長時間着席して座っていることが難しい児童、授業の内容や教員の指示に注意を払えない児童の注意を促す。

給食の配膳、下膳の援助を行う。

清掃時の指示と援助を行う。

下校時の荷物のまとめを援助し、整列を促す。

4. 2014 年度経過

前年度までと同じく全ての時間のサポートに筆者がつけたわけではない。

今年度はクラスの再編成がなくなったため、サポート期間も短くなり、前年度まで入学式翌日からゴールデンウィーク明け第1週まで設定されていたサポート期間が4月末までとなり、実質1週間短縮された。しかし、やはり、クラス替えがなくなったため、4月末までに各クラスとも例年並みに児童は落ち着いた様子となった。

今年度は登校時の昇降口での混雑が少なかった。一つには靴箱の並びが変更され、前年度までは手前、奥と1年生2クラスの靴箱が並ぶように配置されていたが、今年度は奥に高学年、手前に1年生1クラスと配置されたので、靴箱が奥にあるクラスの1年生が自分の靴箱にたどり着くのがまず困難であるという問題が解決された。前年度までの様子を元に環境設定の改善により問題が解決された良い例と言えよう。

また、前年度まで顕著だった腰を下ろして座りこんで靴を履き替える児童が目立たなくなった。座り込みは大きくて重いランドセルを背負ったまま立っての履き替えではバランスを崩して姿勢を保てないために生じていたと考えられるが、今年度はランドセルを背負い、立ったままでも、靴が履き替えられる児童が入学直後から多かった。座り込みは他の児童の動線を遮るため、混雑の原因となるが、今年度は軽減された。

2013年度は天候の関係であまり観察されず、2012年度に目立った雨天の昇降口の混雑だが、今年度はこれもまた軽微であった。しかし、それでも傘を巻いて止める、折り畳み傘を畳む、大人の

傘（ばねが強い）を閉じる、などの行為が独力ではできない児童が多数ではないものの、見られた。しかし、今年度はサポート期間の雨天が多く、5日もあり、サポート最終日4月末日も雨天であったが、この朝は雨具の使用に関する問題はほとんど見られなかった。

2012年度にはサポート期間の最後の方まで課題として残り、2013年度は著者のサポート参加時間の関係で確認できなかった名札つけ（安全ピンの扱い）と学用品の整理だが、2014年度も一部の児童だが、サポート終了時まで独力で安全ピンを扱えなかったり、級友との会話に、夢中になって教員やサポーターに促されないと片付けができなかったりすることがあった。

名札つけと共に4月中～下旬まで児童が新入生の一部が援助を必要としたのは、給食の牛乳パックを開く作業であった。給食の後、紙パックの口を開き、水洗いをして乾かしたものを翌朝、接着面をすべて引きはがして平面にする作業を行う。1～2割の新入生は自力で接着面を引きはがすことができず、最初のはがし口を作ってもらうことを必要とした。安全ピンの扱いに見られるのと同様に、指先の力が弱いようである。

学年集会会場への移動は、第3週になっても列が乱れたり、私語が多くなったりすることがあったが、サポート最終日には静かに整列して教室移動できた。

クラス全体への教員の話を集めて聞くことは今年度も難しく、サポート初日で4分の1の児童は教員の話の聞き逃しがあるように見えた。今年度は授業時間のサポートに入る機会が少なかったため、サポート終了時までの様子は観察できなかったが、4月中旬では話の聞き逃しや、聞いてはいても理解が十分ではない様子の児童が少数だが観察された。行動が落ち着かず、サポート初日は着席も困難であり、その後も教員の指示を聞き

逃したり、理解できなかつたりするため、集団行動が級友と同じようにはとれない児童も見られた。こういった児童にはサポート全期間を通して級友とのトラブルも頻繁に見られた。ある児童は4月中旬になっても他の児童がマスターした班毎に音読するシステムが理解できずにいた。周囲に合わせて集団行動をする経験が非常に不足しているように見受けられた。だが、中旬には級友に問題行動を注意する場面もあり、適応の進む様子も見られた。しかし、その一方で2学期になっても感情の統制が弱く、友だちとけんかになる様子も観察された。

一部の新生児に関してサポート全期間を通じて級友とのトラブルが頻繁に生じていた。トラブルの原因としては不快な働きかけを一方的にもしくは互いに行うことからけんかになるパターンがよく見られた。

今年度も教員からトイレの付添が求められた。混雑緩和のために、今年度は1,2組と3,4組とで使うトイレの分けたため、混雑はほとんど解消された。前年度もトイレの使用そのものは問題が少なく、今年度も大きな問題は見られなかった。しかし、学校側としては教室からは目の届かない場所であるので、付添の必要性を感じるのであろう。

今年度は給食と清掃のサポートに参加することができなかった。

前年度もサポーターの注意をひこうとしたり、甘えようとしたりする児童が見られたが、今年度もサポート開始時期から中旬までそのような行動をとる児童が何人かいた。前年度のように体調不良を訴えて気をひく行動までは見られなかったが、自分の持ち物を見せようとしたり、直接的にサポーターの体に触ってスキンシップを求めたりする行動があった。

5. 前年度との比較

今年度の大きな変更は、クラスの再編成をなくし、それに伴い、担任教諭のローテーションもなくなり、サポート期間が短縮されたことである。

サポート期間が1週間短縮されたにも関わらず、一部の児童の安全ピンや牛乳パックの扱いの難しさを除けば、生活面での自立はサポート期間にほぼ達成された。安全ピンを使ったり、牛乳パックの接着面を指で引きはがしたりするなど指先の力を必要とする行為が不得手の児童が若干見られた。これらは予め練習することで指先の力をつけたり、コツを会得したりすることが可能と思われる。

昇降口での靴の履き替えや雨具の片づけは過去2年に比べてかなりスムーズであった。学校側の環境設定の改善も効果があったと思われるが、それだけではなく、新生児一人一人がスキルを身につけられていた。登校の際の荷物の持ち方や靴の履き替え、雨具の扱いについては前年度までの困難な状況がサポーターから学校へ報告されていたので、学校側が新生児保護者などに前もって練習を呼び掛けた可能性も考えられるが、確認できていない。

クラスの再編がなかったので、サポート終了時に再編直後の落ち着きのなさを感じることはなかった。

今年度は授業時間のサポートに参加する機会も少なかったせいか、前年度サポート終了時まで目立った教員の話が聞けなかつたり、鉛筆が正しく持てなかつたりする状態は、サポート開始当初はともかく、終了時期には目立つことはなかった。

サポーターへの甘え行動が今年度も若干見られたが、昨年度のように不調を訴えるような複雑なものではなく、単純で直接的かつ軽微なものであった。また、昨年度まではクラス再編成後、不

安定になったり登校拒否症状や教室に入れなくなったなどのはっきりした不適応を示す新入生が見られたが、今年度はそのように顕著な不適応を示す児童は見られなかった。これは今年度の新入生が元々学校生活への適応性が高く、安定していた可能性もあるが、クラス再編成がなくなったことで新入生へのストレスが軽減された可能性も考えられる。

子ども同士の衝突は前年度ほど目立ちはしなかったが、半数のクラスで特定の児童間の衝突が繰り返し観察された。クラス再編成採用時ならばそういった児童はクラスを分けられただろうが、2013年度はクラス再編成をした後も衝突の多いクラスがあった。一方で今年度はクラス再編成のないまま、元々のクラスが継続され、4月末には特定の児童の衝突があったが、その後、観察の機会を得ると、関係は落ち着きつつある様子であった。

クラス再編成後の児童の動揺、登校拒否症状がなくなり、今回、初期のクラスのままでも衝突は時間の経過と共に減少したことを考え合わせると、クラス再編成は中止されてよかったと考えられる。

6. 前年度までのプランのその後

高木（2013、2014）でも述べた通り、小学校への適応は小1プロブレムを回避すればそれだけでよいわけではない。2年生以降、児童の学校適応のためにどのような配慮がなされるか。また1年生時の対応状況が、2年生以降の適応とどのように関係するか。

2013年度入学生は2年生となった。1年次1学期後半に1クラスで児童同士のトラブルが多発したが、2学期には落ち着いた。サポート後半で登校拒否症状を示した児童の一人は1年2年と通し

て同様の様態を呈した。そのような児童の様子に1年次の級友の中には動揺を示した者もいたようだが、学級活動が成立しないほどのトラブルは生じなかったようである。2年進級時はクラス替えが行われ、1年次担任5名の内、2名が2年次担任となった。担任の病気による不在などによって児童の一部が落ち着きを失ったクラスが1クラス、また、2年2学期に児童同士のトラブルが多発したクラスが1クラスあった。高木（2014）で述べた通り、ただ、前年度担任が持ち上がれば、児童が落ち着くわけではなく、担任間の連携、協力が必要である。1年次からの担任を中心に担任間で協力し合う様子も観察されたが、トラブルの根本的な解決につながった様子はなかった。

2012年度入学生は3年生となった。この学年は1年次から適応がよく、2年次も3年次も適応上の大きな問題は観察されなかった。2年から3年に進級する際には担任の持ち上がりはなかった。

2011年度入学生は現在4年生である。この学年は小1プロブレムは回避されたようだが、2年次、3年次と半数のクラスで、プロブレムや学級崩壊に類似したトラブルが報告された。4年生では担任が一新されたが、2年次、3年次とトラブルの中心とみなされていた児童の内1名が転出したせいも、学年内交流が活発に行われ、学年担任全員で学年全体の児童を見る努力の成果か、学級・学年活動の妨げになるような大きなトラブルはこれまでのところ報告されていない。

高木が述べたように前年度の担任が持ち上がるだけでは児童の適応は必ずしも保障されない。これまでの今年度の状況を見ると、担任の持ち上がりは適応の必須条件でもなく、新奇の担任であっても、教員がクラスを超えて協力し、複数の目と手が児童を見守り、援助することが児童の適応と安定のもたらすようだ。

また、2012年度入学生を見ると1年次から適応

がよく、その傾向が現在の3年次まで継続している。すこやかプランの成果が2012年度入学生に比べると、2013年度入学生では学級面を中心に上がらなかったことについて、高木はサポートの量と質が不足していた可能性を指摘したが、入学前からの子どもの発達状態の良さが早期の安定をもたらし、それがまた続く学年での安定を導いたとも考えられる。

7. 全体的考察

今年度と前年度までとの大きな違いはクラス再編成と担任ローテーションの廃止である。クラス再編成は新入生の実際の様子を観察してからクラス間のバランスをとって編成をすることが目的であろうし、担任のローテーションは学年担任全員が学年の児童全員を理解し、ローテーション終了後も担任のクラスだけでなく、学年担任全員がチームとして学年全体を指導することを目的とする。

前年度までの実施では、クラスの再編成により、トラブルの多い児童同士の関係がクラスを分けることで解消されることがあった。また、これまでの成果を見ても担任がチームとして学年全体を見ていくことが児童の適応とクラスの安定に有効と思われる。

今年度のクラス編成で4クラス全てのバランスがとれているとは言い難かった。半数のクラスではあまりトラブルが見られなかったが、一方で残り半数のクラスでは特定の児童間にトラブルが頻発していた。前年度までであれば、クラスを分けることが検討されたことだろうが、再編成を廃止した今年度はトラブルが続くままサポート期間が終了した。しかし、2学期に入る頃には一部の児童を中心にトラブルが生じることはあるものの、クラス全体は落ち着き、クラス活動は可能な状態

となっていた。前年度(高木 2014)を見ると、クラス再編成によって当初のクラスでの問題のある関係は解消されたものの、新たに問題となる関係が生じることもある。

また、他学年を見れば、教員のローテーションを組まなくとも、担任教員が学年全体を見る意識を持ち、学年共通の活動を行うことで、チームティーチングの成果は十分に得られる。

そして、また、再編成とローテーションを廃止することによって、新入生の環境変化に対する不安な言動は明らかに減少した。4月中のローテーションがなくなっただけで、新入生のサポーターに対する甘えは緩やかなものとなった。他学年ではあるが、担任が健康や家庭の事情で欠勤がちになったときに一部の児童がクラス活動を乱すような行動を頻繁にとるという問題が生じた。少なくとも小学校低学年にとって、決まった担任が安定して存在するということは児童の適応とクラスの安定のために重要な要因となる。

4月中に慣れ始めた級友やクラスの雰囲気や失ったり、5月から新たに異なるクラスに適応したりする負担なく、入学時から特定の教員と信頼関係を築き、1年間クラスと級友関係を継続できることは児童にとってストレスが低減され、心理的安定が速やかに得られると考えられる。

クラス再編成に教育的効果がないとは言えないが、再編成をすることで児童にかかる負担の方が大きいようである。これもまた児童に負担のかかる担任のローテーションを組まなくとも、チームティーチングの成果は得られる。

以上のことから、クラス再編成と担任ローテーションの廃止は児童の適応に望ましいと言えるだろう。

サポート期間が1週間短縮されても支援の達成度合は前年度とあまり変わらなかった。高木(2013)が述べたように慣れた環境の方が子ども

たちができることは多くなり、不慣れな環境に置かれることが子どもたちの行動を阻害してしまうのである。環境の変化に阻害されないぐらい行動を確実に獲得することも重要だが、不要な環境変化をなくし、安定した環境で子どもたちの行動を保障することも小1プロブレムの防止には有効と思われる。

2011年度入学生の経過を観察して、小1プロブレムの防止だけでなく、継続していく小学校生活への児童の適応のためには、2年次以降に配慮が必要であり、不足すれば、2年生以上で不適応が生じるという例について先行研究(高木 2013)で述べた。しかし、今年度当該学年を観察すると、不適応が生じた学年であっても、新たな学年で適切な配慮がなされれば、適応状態に到達できることが確認できた。

各年度の達成度の違いは、サポートの質と量の違いによるものなのか、入学時点の新入生の発達状態が異なるためなのか(高木 2014)という問題に対する結論は未だ出せない。さらなる例を観察していくことが必要だろう。

すこやかプランの実施は4年目となり、今年度はクラス再編成の廃止という大きな変更が加えられた。現時点で来年度以降、すこやかプランが継続されるか否かは公にされていない。

プランとボランティア参加の継続が可能であれば、小学校1年生入学時の状態と適応過程、サポートの成果について記録を続けていく予定である。

謝辞

昨年度に引き続き、教育サポーターの活動に参加の機会を与えてくださったA小学校の先生方、ならびに児童の皆さん、また、ともに活動した教育サポーターの皆さんに心より感謝申し上げます。

引用文献

- 高木友子(2013)「小1プロブレムを考える—保護者サポーターから見たS市すこやかプラン—」湘北紀要第34号
- 高木友子(2014)「小1プロブレムを考える2—保護者サポーターから見たS市すこやかプラン2—」湘北紀要第35号
- 東京都教育委員会(2008)「東京都教育ビジョン(第2次)」
- 月森久江(2013)「『小1プロブレム』解決ハンドブック」講談社

How to solve the First-grade Problem 3 - Thinking about the S-City Sukoyaka Plan 3 -

Yuko TAKAKI

[abstract]

This was the 3rd report of A Elementary School in S city near the Capital City has applied the Sukoyaka Plan to solve the First-grade Problem at A Elementary School in S city. The plan was changed from one applied last year. Classmate rearrangement and teacher rotation were discontinued. Term for Pearents' support was a week shorter than one of last year. At the end of the term the 1st grade students sent elementary school life by theirselves. They adapted faster because of the same teacher and classmates. The classmate rearrangement and the teacher rotation may bring a small merit and a large demerit.

[key words]

the first-grade problem, sukoyaka plan, parent supporters, classmate rearrangement, teacher